
狂人ピアノ

秋島キサト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂人ピアノ

【Nコード】

N8935A

【作者名】

秋島キサト

【あらすじ】

ある裕福な家に生まれた少女は、ひたすらにピアノだけを弾かされ続けます。手が無くて、腕が無くて、体が無くても。

少女が居ました。少女は、とても裕福な家に生まれました。少女の両親はとても厳しくて、この少女に何か一つのことを徹底的にさせるべきだ、と考えました。それで少女を世界一にしよう。そう思った両親は、やっと立てるようになった頃の彼女に、ピアノを習わせ始めました。

広い広い少女の部屋の真ん中には、立派な真つ黒いグランドピアノがあります。四角い小さな窓が一つ、ピアノの正面の壁にあります。その反対側の壁に、立派な重々しいドアがあります。それ以外何もありません。硬い赤い絨毯が、彼女の足元を固めています。高い真つ白な天井は、シャンデリアが照るとちかちか光りました。クリーム色をべったり塗った四枚の壁は、全て彼女から離れています。少女は常にピアノの前の椅子にじっと座り、いつも鍵盤に指を置いていました。食事は召使いが運んできて、その場で食べます。寝るときは、椅子に座ったまま、鍵盤に突っ伏して眠りました。少女が幼かった頃は、夜中によく、なんとも不愉快な不協和音が聞こえたものです。

少女は外に出させてもらえませんでした。毎日一曲の楽譜を渡され、次の日までにそれが弾けないと父親にぶたれました。日が照っているうちは講師がやってきて、彼女にピアノをたたき込みました。その後、彼女は閉めきった部屋で狂ったように練習をします。部屋が密閉されている限り、音は外に漏れることなく、赤い絨毯と白い天井とクリーム色の壁に吸収されていきました。

彼女は、外に出たいと思ったことはありません。世界にはピアノがあるだけだからです。

彼女は、楽譜以外の言葉を知りません。誰も教えてくれないからです。

同じ年頃の少年少女が、学校に通って淡い恋をする頃も、彼女は

酸素の薄い部屋でひたすら鍵盤を叩いていました。

その日渡された楽譜は、いつもより少し難しいものでした。明日までに弾けるようにならないと、父親にぶたれます。ぶたれるのは痛いので、少女はそれが好きではありませんでした。だから、繰り返し繰り返し、同じ鍵盤を叩いていました。

その時です。激しい鍵盤の音の隙間に、こんこんと小さな音が潜り込みました。

少女はびたりと指を止めて、椅子に座ったままくりりと振り返りました。この音を聞くのは、決まって、父親と講師がやってくるときです。だから少女は、ドアを見ます。しかし、少女は、部屋が暗いことに気が付きました。二人がやってくるのは、部屋が明るいきだと決まっているのです。それ以外の時間に、彼らが訪れることは絶対にありません。

彼女は立ち上がって、ピアノの椅子から離れました。正面の壁、窓を見ます。

そこで彼女は、初めて父親と講師と召使い以外の人間の顔を見ました。

四角い窓の外に、少年の顔がありました。年頃は少女と同じくらいですが、そんなこと少女には分かりません。丁度少女のピアノと同じような、真っ黒な髪と瞳を持っていました。どこも見えていないような目で、少女の方を向いてじっとしていました。襟だけ見える服も真っ黒で、夜の闇にとけ込んで流れていきそうです。

少女は不思議に思ったのと、怖いのと、好奇心とで、ゆっくり窓辺に近づきました。家の中と外で、地面の高さが違うからなのか、少年は少女より背が低く見えました。

少女は少年を見つめたけれど、言葉を知らないのです、唇を少し動かしたまま、黙っていました。少年はどこも見えていないような目で少女を見ていましたが、不意に、悲しそうな顔をします。

「かわいそうに……。ずっとピアノを弾かされ続けて居るんだね」少女は、少年のいった言葉を理解することが出来ませんでした。

すると突然、少年の手が、少女に向かって伸びてきました。その手は窓ガラスを破り、少女の腕を掴みます。ガラスの破片で傷ついた手で、少年は、同じく傷ついた少女の両腕を持ち上げさせました。そして、窓枠越しに、少女のやせ細った両手を自分の前に差し出させました。

少女は訳が解らず、という言葉もなく、ただ少年のなすがままにされています。

少年が、一度屈みました。立ち上がったとき、手には、何か銀色に光る、大きなものを携えていました。薄い銀色の板が二枚、「x」の形に交差しています。下半分は木で覆われているようでした。実はそれは、鋏というものを切るための道具なのですが、少女はそれを知りません。手をさしのべたまま、黙ってそれを見ていました。

少年は、自分の腕と同じくらいの長さのそれを両手でもって、突然、銀色の部分で少女の手首より少し上の部分を挟みました。

月光を受けて銀色が光ります。

じょきん。

さつきまで少女の体についていたものが、一つ、窓の外にぼとつと落ちました。続けて、じょきん。もう一つ、窓の外にぼとつと落ちました。

少女は、今まで一度も感じたことのない激痛に、狂ったような悲鳴を上げました。

しかし、少年はとても嬉しそうに笑います。彼女の悲鳴など聞こえないかのように。

「ほら、これでもう、ピアノを弾かなくて済むよ」

それだけ言っ、少年はくると踵を返し、走り去っていきました。少女は絨毯に倒れ込み、どたん、ばたんと転げ回りました。手のない両腕から血が吹き出て、たくさん絨毯に染み込みましたが、絨毯は元々赤だったので、色は変わりません。

少女は一晚、鼓膜が破れるほどの叫声を上げ、部屋中を駆け回っていました。

次の日から、父親と講師が来なくなりました。

それでも少女は再び椅子に座り、ピアノを弾きます。あるはずのない指を鍵盤に載せて、練習の途中だったあの曲を弾きます。聞こえるはずのない音が、赤い絨毯と白い天井とクリーム色の壁に吸収されていきました。少女は痛みさえ押し殺すように、脂汗を流しながら必死で腕を動かします。

また、夜が来ました。部屋の中が暗くなり、それでも少女は椅子に座っています。

こんこん、と、少女の耳のピアノの音に、小さな音が潜り込みました。

少女は一瞬動きを止め、しかし、またピアノを弾き始めました。立ち上がりもせず、聞こえない振りをして、一心にピアノを弾いていました。

不意に、視界の端に、黒い人影が現れます。

少女は恐怖に歪んだ顔で、彼を見上げました。

「もう、ピアノを弾く必要はないのに……」

少年は悲しそうに言います。手には、あの、銀色に光る鋏を持っています。

少女はとっさに立ち上がろうとしましたが、少年が足で少女の腿を踏みつけ、椅子に押さえつけて止めました。彼の両手が、重々しく鋏を開きます。

少女は叫ぶことも出来ず、その刃が、自分の肩を挟むのを見ているしか出来ませんでした。

じよきん。じよきん。

少年は、少女の両肩を立て続けに切りました。

「ほら、これでもう、ピアノを弾かなくて済むよ」
失神した少女に、少年はとても嬉しそうに言いました。

それでも少女は、ピアノを弾き続けます。父親が来なくても、講師が来なくても、腕が無くて、全身を大きく動かして、さながら腕も手も指もあるかのように、一心不乱に鍵盤を叩き続けます。顔中を脂汗が流れても、目を開けるのが精一杯でも、ひたすらひたすら、狂ったように音を出します。

窓は割られたままですが、日が出ているうち、人が来たことはありません。

また、夜がやってきました。

少女は言葉を知りませんから、考えることは出来ません。しかし、彼女は既に、今夜もまた彼が来ることを知っていました。そして、彼女の予想通り、彼の影は彼女の視界の端に現れました。

「どうして……？」

少年は呟きます。少女は、練習をやめて、少年を見上げました。

「どうして……？もう、この屋敷には、君以外生きた人間など居ないのに……。君はもう、自由なのに……。ピアノなんて、弾かなくて済むのに……」

少年は、とてもとても、悲しそうでした。哀れんで、包み込むような、そんな口調でした。

少女は彼の言葉を理解することは出来ませんでした。じつと彼の顔を見つめて、小さく唇を動かしていました。

言いたいの、言葉が見つからない。

言葉を知っているものならば、そういうでしょう。

少年は、また、手に鋏を持っていました。

ゆつくりと、その刃で彼女の首を挟み込みます。彼女は冷たい刃の感触に、しかし、怯えることなく、ただ、とても何か言いたげにしきりと、小さく唇を動かしていました。

「残念だ……。残念だよ……」

少年は目を閉じ、祈るように呟きます。少女は重たい目を見開いて、ずっと、彼の顔を見つめていました。

少年の両手が、近づきます。

じょきん。

さっきまで彼女の身体と繋がっていた部分が、ごとりと、絨毯の上に落ちました。

椅子に座っていた腕と首のない体が、ずるりと横に倒れます。頭の無くなった部分からは勢いよく血が噴き出していて、いくら絨毯が赤いとはいえここまで吸収出来ないでしょう。どくどくと、絶えず、彼女の身体から唯一の証が流れていきます。生きていた証が少年は二つの彼女を見下ろし、ちよつと俯いた後、踵を返そうとしました。

その時です。

「……ピア、ノ……」

少年の足下から、うめき声にも似た、消えていきそうなソプラノの声が聞こえてきました。

少年は振り返り、それを見下ろします。

彼女の頭が、絨毯に転がり自身の髪の毛に埋もれた頭が、少年の方をじつと見ていました。

かさかさになった唇が、小さく、ほんのわずかに動いて、言葉を紡ぎます。

「フォ、ルテ……リピート……エンドレ、ス……」

血走った目で少年を見上げて、彼女はそう言いました。生まれて初めて、彼女が発した言葉でした。

部屋が広すぎて、赤い絨毯も白い天井もクリーム色の壁も、その言葉を吸収しませんでした。

少年は黙って、悲しそうに、ただ悲しそうに、彼女の顔を見下ろしています。

やがて、静かに踵を返して、入った窓から去っていきました。
少女は血走った目で、彼の消えた窓をいつまでも見つめています。

「……で、両親も講師も召使いも、大広間で殺されていたんだってさ。あの屋敷に残されたのは、死体のみ」

「やあだ、やめてよ怖いじゃない！」

「でもね、おかしいの。その女の子の死体だけ、無かったのよ」

「え……？」

「もしかすると、まだ動いていて……」

「き、きゃー！！ほんとにほんとにもうやめてー！！」

「あっはは、冗談よ。……ん？」

「こ、今度は何……？」

「今、ピアノの音しなかった……？」

少女はピアノを弾き続けます。父親が来なくても、講師が来なくても、体が無くても、さながら腕も手も指も体もあるかのように、一心不乱に鍵盤を叩き続けます。ひたすらひたすら、狂ったように音を出します。

今夜も、また。

（後書き）

旅行中ふと思いついたので連載ほったらかしで執筆。どうもすみません……。

そしてピアノ好きな方ごめんなさい。

かく言う自分もピアノ好きですが。

文章長くて、携帯の方は読みづらいかと思いますが、ご容赦下さい。最後の女の子たちの会話は、入れるかどうか迷いました。

感想・意見、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8935a/>

狂人ピアノ

2010年10月8日15時45分発行